

青年期における自己準拠性・他者準拠性に関する研究

— 場による相違と self-esteem 及び対人関係観尺度との関連 —

綾本 幸子

I. 問題と目的

「国際化」や「情報化」の流れのなかで、私たちの周囲の世界はどんどん広がっている。このような社会の中で、不安感を抱いたり混乱したりせず、精神的に健康な状態で生きていくためには、自己を改めて振り返り、自己の拠り所を構築しておく必要があるだろう。そこで、本研究では、「自己」の変化と再構築の時期であり、学校というある種守られた社会からより大きな社会へ飛び出す準備段階である青年期初期から中期に焦点をあて、これからもまだまだ進む外への活動領域の拡大に対処するため、拠り所を固め直すという視点から「自己」を振り返ることを目的とする。従来の「自己」に関する理論や研究では、「他者・社会と関わりを持つ自己」と「それと切り離して考えられる自己」という二側面を重視して自己がとらえられ、それらが文化と密接に関わっていることが指摘されている。これを受けて、本研究でいう“自己の拠り所”についても、「自己準拠性」と「他者準拠性」という二側面からとらえる必要性と文化的特徴との関係の検討の必要性があると考えた。さらに、この二準拠性は自己を取り巻く場によって、その在り方が異なると考えた。

以上より本研究では、自己準拠性を“自己自身の意思や存在自体を自己の在り方の基準、拠り所にする側面”、他者準拠性を“自分の周囲の他者の意思や自己と他者との関係を自己の在り方の基準、拠り所にする側面”と定義し、青年にとって重要だと思われる家族、仲間、クラスの3つの場を取り上げて、そこでの二準拠性の在り方と精神的健康との関連を検討する。これに加えて、従来指摘されてきた自己よりも他者との関係を重視するという日本の特徴と3つの場における二準拠性の在り方がどう関連しているのかも検討する。

II. 研究1

(1) 目的

一般的にとらえられる自己準拠性・他者準拠性尺度を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行う。

(2) 方法

従来の自己の二側面に関する研究 (e. g. 山本, 1989; Marukus & 北山, 1991; 伊藤, 1993) を参考に、自己準拠性を「(a) 自分自身の意思行動への自由な表現、

(b) 個性の認識・発揮への自由な表現、(c) 自己評価を基準としての行動の自由な表現」、他者準拠性を「(a) 他者の期待や他者から与えられた役割の遂行への自己コントロール、(b) 他者への共感・調和への自己コントロール、(c) 他者評価を基準とした行動への自己コントロール」と定義し、23項目の尺度を作成した(4件法)。これに、妥当性の検討のため、自意識尺度(菅原, 1984)、対人関係観尺度(浜口, 1982)を加えて、質問紙を作成し調査を実施した。尚、調査対象者は、高校生126人、大学生163人であった。

(3) 結果と考察

因子分析の結果、想定どおりの自己準拠性、他者準拠性の二因子が得られた。尚、 α 係数は、自己準拠性尺度が.81、他者準拠性尺度が.72であった。次に、自己準拠性・他者準拠性と自意識尺度との関連を検討したところ、高校生では、公的自意識と自己準拠性に相関はないのに対して他者準拠性とは相関があること、私的自意識は自己準拠性及び他者準拠性の双方と相関があることが分かった。大学生では、公的自意識は自己準拠性と負の相関があり、他者準拠性とは相関があること、私的自意識は、自己準拠性及び他者準拠性双方と相関がないことが分かった。また対人関係観尺度との関連を検討したところ、高校生では、間人主義は自己準拠性及び他者準拠性双方と相関があり、その相関は他者準拠性の方が高いこと、個人主義は自己準拠性とは低い相関があるが、他者準拠性とは相関がないことが分かった。大学生では、間人主義は自己準拠性と相関がないが、他者準拠性とは相関があること、個人主義は自己準拠性とは相関はないが、他者準拠性とは対立的な相関があることが分かった。つまり、自己準拠性が個人主義に、他者準拠性が間人主義にというような一義的な関連があるわけではないと言える。

以上の結果は、従来の自己の発達の研究結果と一致しており、ここで作成された自己準拠性、他者準拠性尺度が妥当性をもつことが示された。

III. 研究2

(1) 目的

家族の中、仲間の中、クラス(高校生、大学生に共通する公的な場)の中という三つの場において自己準拠性・

他者準拠性の高さが違うことを示し、どの場での自己準拠性・他者準拠性の高さが、精神的健康の指標としての self-esteem を高めるのかを検討する。また、日本の特徴と自己準拠性・他者準拠性の関係を見るため、日本の特徴と言われる間人主義の概念を含む対人関係観尺度との関連を見る。

(2) 方法

研究1で作成した自己準拠性・他者準拠性尺度23項目を、「家族」「仲間」「クラス」の3つの場限定して4件法で回答を求めた。また、self-esteem 尺度 (Rosenberg, 1965)、対人関係観尺度 (浜口, 1982) も同時に実施した。尚、調査対象者は、高校生140人 (男子132人, 女子107人)、大学生297人 (男子193人, 女子104人) であった。

(3) 結果と考察

因子分析の結果、いずれの場においても研究1同様、自己準拠性・他者準拠性尺度の二因子が得られ、 α 係数はいずれも .80以上と高いことが確かめられた。そこで、まず3つの場における自己準拠性・他者準拠性に違いが見られるかどうかを検討した。その結果、高校生、大学生ともに仲間、家族、クラスの順で、自己準拠性及び他者準拠性が高いことが示された。次に、self-esteem を目的変数、3つの場における自己準拠性、他者準拠性を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果、高校生男子では、仲間内の自己準拠性の高さが self-esteem の高さに強い影響をもち、高校生女子では、クラス内での自己準拠性の高さと同様内での他者準拠性の低さが強い影響をもっていた。大学生男子では、仲間内の自己準拠性の高さ、家族内での自己準拠性の高さ、仲間内での他者準拠性の低さ、クラス内での自己準拠性の高さの順で、強い影響をもち、大学生女子では、仲間内での自己準拠性の高さ、仲間内での他者準拠性の低さの順で強い影響をもっていた。すなわち、仲間内の自己準拠性、他者準拠性が self-esteem の高さの程度に効いているには違いないが、仲間内での自己準拠性は、self-esteem を高める要因として効いているのに対して、仲間内の他者準拠性は self-esteem を低める要因として効いている。また、発達的に見ると、男子では三つの場すべての自己準拠性

が self-esteem を高める要因として効き、仲間内の他者準拠性は self-esteem を低める要因として効く方向へ発達し、女子では、仲間内での自己準拠性は、self-esteem を高める要因として効き、仲間内の他者準拠性は self-esteem を低める要因として効くという方向へ発達していく。

以上のことを合わせて考えると、男女とも仲間内の自己準拠性と他者準拠性が、self-esteem と最も関連が強いあるいは、強くなる方向へ発達すること、つまり、重要な他者の中での自己準拠性と他者準拠性の在り方が精神的健康と関連があることが分かった。しかし、他者準拠性については予想に反して、精神的健康を妨げるという負の効果をもつことも示された。このような結果は、青年期特有のものである可能性もあり、あるいは、他者準拠性が self-esteem によって測定されない精神的健康を高めるものとして働くという可能性もある。これについては、さらなる検討が必要であろう。

最後に、対人関係観尺度と場別にみた自己準拠性、他者準拠性との関連について検討した。自己と他者に焦点を当てた二側面と文化差の研究では、その二側面の優位性によって文化差を解釈しているが、日本の特徴を示す間人主義と場別にみた自己準拠性、他者準拠性の相関を見ると、概ねどの場でも自己準拠性と他者準拠性は、間人主義と相関があることがわかる。つまり、日本の文化的特徴を強く示す人でも自己準拠性、他者準拠性の双方の側面が高いことが言える。

IV. 今後の課題

本研究においては、発達差を青年期前期から青年期中期という狭い幅でみているため、二準拠性の発達的变化をとらえにくいこと、精神的健康の指標として self-esteem を用いたが、それだけではなく、より多面的に精神的健康をとらえる必要があること、文化的特徴との関連を明らかにするならば、他文化との比較検討が必要であることなどが考えられる。今後の課題としては、まず、研究対象年齢の幅を広げ、二準拠性の発達的变化をとらえることがあげられ、二準拠性の発達的变化を充分におさえてから、後に残された課題に取り組むことが目指される。